



発行：新潟市仏教会
責任者：小林 一三

宮崎哲弥師の講演を聴いて

新潟市仏教会 副会長 今 湊 良 信

二年に一度の新潟市仏教会の「市民のための仏教講座」、今回は評論家の宮崎哲弥師を講師にお迎えした。まず、宮崎師は「ブツダとは誰のことか？」という問いかけに始まり、初期仏教の成立と上座部（テラワダ）仏教の四苦八苦・十二縁起・四諦八正道などの教えについて解説された。決して易しい内容ではないのだが、パワーポイントを用いた宮崎師の、舞台上を移動しながらの巧みな解説により、居眠りする人もなく、むしろ熱心にメモを取る人の姿が各所で見られた。宮崎師は、仏教が出現した紀元前六世紀のインドは、技術の進歩や富の偏在により人々の間でストレスと不安が広がっていた状況が現代とそっくりであり、さらに、家族主義・共同体中心主義が崩壊している現代において、最初から個人を重んじる仏教が果たせる役割は大きい。テラワダ仏教を再認識することは、決して日本の大乘仏教を否定すること

ではなく、むしろ、その意義の再認識につながる、と結論された。

私は宮崎師の講演を聴いて主に三つのことに気づいた。第一に、仏教の目的は自身から自由になること。他者ではなく、自分で自分を苦しめる心の苦しみから解放たれて生きることであるという基本をあらためて思い出した。

第二に、これは全くの私見であるが、大乘仏教は、おそらくプラトンのイデア論の影響を受けて、「無意識」という未知の領域を発見して成立したということである。宮崎師が何度か繰り返したように、大乘仏教の祖であるナーガルジュナが「言葉」（意識）にこだわった（否定した）のは、そのためである。テラワダ仏教の分かりやすさに対する、大乘仏教の分かりにくさの理由はここにある。さらに、大乘仏教は、無意識の奥底に広がる世界（はたらき）を発見し、これを法（ダルマ）・空・仏性・無上覚あるいは「永遠のいのち」などと名付けて意識化した。テラワダ仏教が苦の根源として取り除こうとした「無明」の中に、大乘仏教は、何と救いの「光明」を発見してしまったのである。これは、心理学者のユングが、偉大な先達であるフロイトの制止を振り切って、無意識の奥底に突進して求めたものである。

第三に、宮崎師は、優しく親切でフレンドリーな人柄で私たちスタッフと観客を魅

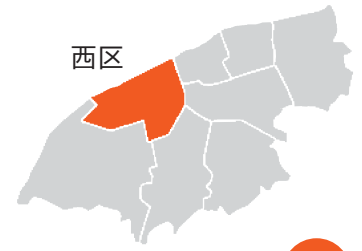
了したが、実は、これが全ての仏教の根底にある大切なものである。これを「慈悲」という。全ての生き物の幸福を願う願いである。さらに、大乘仏教では、これを個人の願いではなく、先の「仏性」・「いのち」からの呼びかけであると考え、その中心的概念となった。

つまり、私たちはテラワダ仏教に限りない敬意を払いながらも、もう後戻りすることはできない地平にきている。偉大な先人に学びながらも、未来という暗闇の中に光明を求めて、サイの角のように進むしかない。ダルマと自己を抛り所として。大乘仏教においては、この二つは一つだから。以上のことに気づかせていただいただけでも、大変に多忙な宮崎師に来ていただいた甲斐があった。先生、どうもありがとうございました。どうぞ、お身体お大切に。



講演する宮崎哲弥師

シリーズ 市区八区



西区の記事

坂井輪仏教会とチヨットの
護念寺自慢

護念寺 細川好円

少子化が叫ばれて久しいが、なかなかいい政策が浮かばない。子どもが授かる前に、まずは結婚だ！ということ、周りを見回したら、檀家さんの家庭にたくさんのお孫さんの男子女子がいた。よし！それならお寺で合コンしよう！檀家の跡取りや子どもが少なくなれば、檀家が少なくなるしお寺の維持もできなくなる。お寺の危機だ！ということ、坂井輪仏教会主催で、お寺で合コン。「寺コン」と銘打って、婚活が始まって今年で6回目を迎えた。会場は護念寺。1回目は、何んと男女合わせて80人。見合い時間1分でも、80分。参加者曰く「誰が誰だか、名前も顔も覚えられない！」。それでもカップルが2組できたのだが、ゴールまで至らなかつた。2回目からは、10組募集で年齢制限やお見合い時間を15分と決め、気に入った相手の番号を用意に書き、その番号の相手とお見合い。これを3回ほど繰り返して最後に、マッチしたカップルを発表。その間、B B Qで飲み放題。午後3時から8時頃までの開催時間。後片付けは参加者・スタッフの全員で。次回は、もっと年齢を上げて、女子35歳から45歳、男子40歳から45歳にしようと思っている。カップル誕生には、市内有名ホテルの宿泊券と、吉運堂提供の長岡花火ご招待券が当たる。

その他、恒例行事となりつつあるのは、これまた坂井輪仏教会主催の「上方落語独演会」だ。1回目は、露の五



寺コンB B Q風景

郎門下生の「露の新治」。2回目は、新発田市出身の「三笑亭夢丸」。会場は2か所。小針の瑞林寺や小新の満榮寺や新通の護念寺。木戸銭1000円で、どちらの会場へ行っても、2回観てもOK！満堂だったことは言うまでもない。

また、護念寺では週に3回、ソロバン塾が催されている。午後4時から7時半まで、たくさんのお孫さんのお孫さんたちが集まってくる。中には、大人の生徒もいて、認知症防止のためか一生懸命だ。何よりもいいことは、子どもたちがお寺になじむことだ。本堂から入ってくるので、ご本尊に合掌一礼してくる。日曜学校の代わりとなっている。



2016年9月17日付 新潟日報掲載

最近始まった行事で「にしっこ食堂」がある。子どもたちの、親の仕事や貧困などにより食事を満足に取れない子どもたちの支援を目指すボランティア団体だ。子どもたちの孤食・個食・偏食をなくしたいのと、家庭の団欒を取り戻したいという思いもあって、会場提供をしている。お寺というところは、広いキッチンとホールのようなものがあり、食器もたくさんある。本来、お寺は地域とは持ちつ持たれつの間柄の中で発展してきた。大いに利用してもらいたいと思うと同時に、昔のように、寺子屋として開放すべきだと思っている。午後2時頃からボランティアが集まり、キッチン狭しと料理をしている。毎月第2、4金曜日。午後5時から7時まで開設。小学生以上1食200円。食事を終えた子供たちは、ご本尊前で宿題や絵本の読み聞かせに楽しい時を過ごしている。お寺の敷居が高いといわれているが、この寺には敷居はない。

もう一つ話題を。護念寺の新通保育園の横の田んぼを購入しました。理由は、土の匂いの子供たちに育ってもらいたいからです。この頃の子どもたちは、ひ弱な子どもたちが増え、アトピー体質やアレルギー体質も増えてきました。そこで、泥んこ遊びや、虫の追いかけてこなどをさせて、抗体性のある体力造りをして、未来に向かって突き進んでくれる様な子に育ってもらいたいと思っています。

シリーズ 市八区しやくはっく

秋葉区

秋葉区の記事

思いを伝える
施設訪問

久昌寺 中野睦宗

「皆様、お仏間にお越しくださいました。本日は私が担当です。先ほど施設長とお話の中で、『お寺様が来られてお経・お話をされている間、ふだん騒がしい人でも不思議と静かに耳を傾けておられます。なんでしょうかね?』と、日頃の感想を伝えてくださいました。この言葉は本当にありがたいことであると共に、お坊さんとしての責任の重さを再確認させていただきました。」

お経終わってのお話の最後に、私は次のようなことを申し上げます。

「あなたができないことを職員の方がお手伝いしてくださった時、どうぞ感謝の気持ちをその職員の方に伝えてください。言葉で



『ありがとう』、言葉が少し無理な方は手を合わせて、あるいは目で、笑顔でご自分の感謝の気持ちを伝えてください。それを受けられた職員の方はきつと、『この仕事は大変だけれど、おじいちゃんが喜んでくれた。おばあちゃんが私に『ありがとう』と言って、感謝してくださった。よしこれからもお一人お一人大事に、前向きに勤めていこう』と思います。そしてこの仕事にやりがいや生き甲斐を感じ、今まで以上に皆さんを大切にされ、この施設が極楽浄土になります」と。

秋葉区仏教会では区内の四ヶ処の特別養護老人ホーム、老健施設に伺っています。毎月、有志の方が行かれ読経と法話をされます。またそのうちの三ヶ処の施設では、宗派を三グループに分け春秋のお彼岸・お盆の三回、それぞれのグループ（五〜十名）が担当して施設に伺い、読経と法話をさせていただきます。

ご参加の皆さんが大変喜んでくださって、手を合わせて拝んでくださいます。私もたくさん温かい心のおみやげをいただき、スキップしている想いで帰ります。



『新潟市に区が八区』あることと、仏教語にある『四苦八苦』をかけて、各区の記事を順番に紹介するコーナーです。

「方便」

淨徳寺 浅平 真

方便と聞くと「嘘も方便」という言葉がすぐに思い浮かぶのではないでしょうか。実際に嘘で一時の窮地を脱したり、他に先んじることができたりする場合があります。でも、本当に嘘をつくことが方便になるのでしょうか？

方便はサンスクリット語（梵語）のウパーヤという言葉の訳で「近づく、到達する」という意味から「巧みに目標に近づくこと、向上し進展するための手段」といった意味になります。

お釈迦様は教えを説く際に、話す相手の能力や性質に応じて、それぞれに相応しい方法で教えを説かれたといわれています。つまり、修行を積んだ能力のある出家者には、高邁な仏教の教理も直截的に受容されたとしても、そこまでの素養に欠ける一般の在家者などには、その人に応じた簡単な比喻や課題を通して教え導いてくださったそうです。方便は、個々に相手を思いやり真実へと導くための方途です。

たとえばテニスの初心者を相手に、いきなり150キロ超のサーブを打って「さあ、しっかり返してこい！」と言っ

たところで、キャリアの無い者に返球できるはずがありません。しかも、そのままだではテニスの楽しさや素晴らしさといった、もつとも肝心なことを何一つ伝えられずに終わってしまいます。やはり、最初は優しく打ちやすいボールを出してあげてこそ、はじめてテニスに親しむこともでき、やがて本当の楽しさや素晴らしさにも通じるというものです。個々の力量に見合った適切な指導で人を導くという意味では方便も同じです。

また、ともすると方便は真実と相対しているかのようにも思われますが、実は真実の世界へ確実に導く巧みな手段が方便なのです。一方、真実を後ろ盾とせず、真実へと導かないものを方便とは呼びません。

ところで、嘘は常に真実の対極にあります。その嘘をどれほど巧みに重ねてみても、つまりは一時凌ぎの逃げ道にすぎず、真実に反することは明らかです。

さて、それでもまだ「嘘も方便」と言えますか？



「うちの婆さん、死なねもんだと思うてたわね」百才を超えた母親の死に際し、息子さんが何気なく発した言葉です。「学問」としての仏教を理解するのに精一杯だった若き日の私には、その言葉は実に奇妙に思えました。しかし時を経て、自分の親の老いと死に直面すると、その言葉が鮮明に蘇り、私の中で響き渡りました。

誰でも親の長生きを願います。その願望が日々達者な姿を目にしていると、当たり前のこととなり、いつしか「親は死なない」という奇妙な確信に変わってしまいました。老いた親の気遣いに対しても、明日も明後日も達者でいてくれると思えばこそ、「あんまいかったいね」という言葉を飲み込んでしまったのでしょうか。やがていきなり訪れたお迎えに呆然とし、感謝の言葉を伝える機会を失ってしまったことを、後悔と慚愧の思いで何度も振り返ったものです。

「諸行無常」を教科書的に説いてきたかもしれない私に「いのち」とはこういうものだと思ってもって教えてくれた親でありました。葬儀や法事等の亡き人と向き合う場合は、やがてお迎えをいただく自分の「いのち」に改めて思いをいたす機会でもあります。

それは仏となられた亡き人からの戴きものでもあるのでしよう。

後記に代えて（善）

